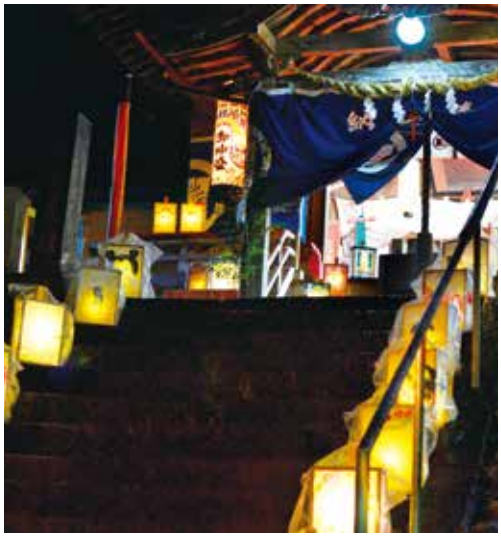
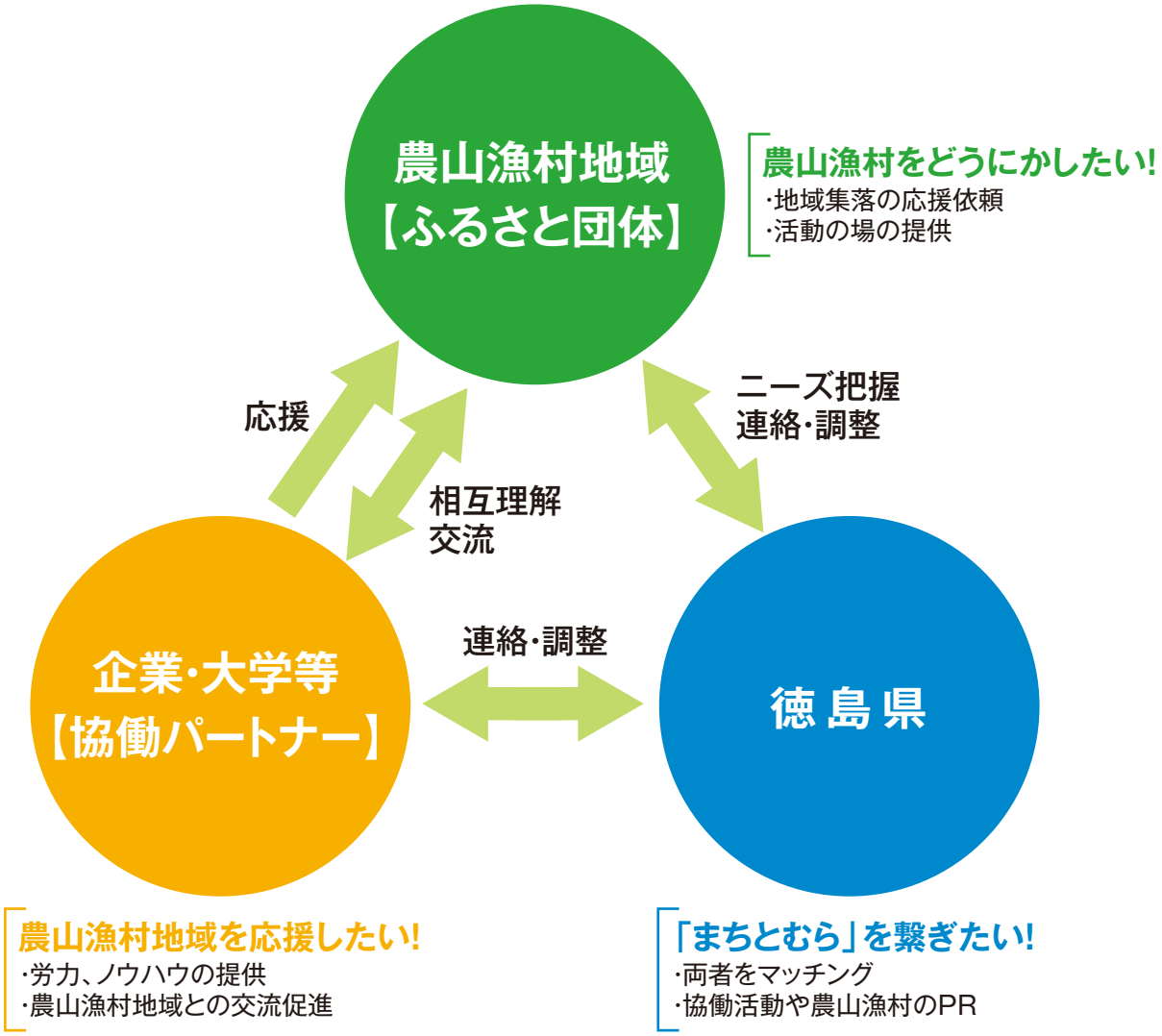
とくしま農山漁村（ふるさと）
応援し隊事業



徳島県が推進する「とくしま農山漁村（ふるさと）応援し隊事業」。
集落道の草刈りや地域のお祭りなど、農村保全や地域活性化の取り組みで
「応援を受けたい」と考えている農山漁村の団体（ふるさと団体）と、
社会貢献をしたい、地域交流を活発にしてビジネスにも繋げたいなどの理由で
「応援したい」と考えている企業・大学・NPO法人等の
団体（農山漁村協働パートナー）を結びつけて協働活動を行い、
地域の魅力を未来へ繋ぎ、
さらに農山漁村と都市の人と人との交流を目指す事業です。



応援したい!
農山漁村協働パートナー▶▶▶

Q-1.どんな活動をするの?

大学、企業、NPO法人等と農山漁村集落の方との協働活動になります。例えば、棚田の保全活動、耕作放棄地の復元作業、農繁期の農作業の支援、棚田オーナー制度への参加、農山漁村観光ビジネスでの提携など。

Q-2.参加するメリットは?

【企業側のメリット】

社会貢献活動(CSR活動)による企業のイメージアップ、福利厚生・研修先としての社員のリフレッシュ効果、地域資源や特産品を活用したビジネスチャンスなど挙げられます。また、活動事例は、本事業のPRとして様々な形で活用させていただきますので、企業PRとしても有効と考えています。

【大学側のメリット】

調査研究の場、学生の人材養成の場として、コミュニケーション能力の向上、地域の魅力を掘り起こし発信する能力や地域の見方・調べ方を身につけることができます。また、地域とともに歩む大学という社会的ステータスの向上にもつながります。

【NPO法人のメリット】

法人自らの目的・使命をより大きく、充実して実現できます。 農山漁村、行政から情報を得たり、課題の提起を行う機会となります。

Q-3.参加する企業、大学、NPO法人等に条件はあるの?

参加する企業等は、趣旨に賛同した団体で、指定の参加申込に記入された活動の内容等を適正と県が認めた団体です。

Q-4.参加するのに費用はかかるの?

本事業への参加にあたって、登録料や会費などの費用は必要ありません。ただし、協働活動に掛かる費用については、農業体験など費用が必要な活動もありますので、事前に受け入れ側との間で調整が必要になります。 協働パートナーでは、活動への参加者は、必ずボランティア保険等に加入していただくことになっています。

Q-5.県の役割は?

県は、協働パートナーやふるさと団体を募集し、両団体のマッチングや調整を行うとともに協働活動が円滑に行われるように交流会や研修会などを開催します。また、協働パートナーの活動や農山漁村の情報を広くマスメディアや県民にPRします。

株式会社 高橋ふとん店

牟岐町出羽島での活動の様子。出羽島を考える会の原田友彦さん指導のもと、段々畑の手入れを入念に行う。

はるみの苗木を植えてみんなで命名。「また来年、成長が見えたらいいな」と再訪の楽しみになっている。

勝浦町の「ビッグひな祭り」に向けて、ひな人形の受け取り作業を応援。

島の豊かな自然と温かいおもてなし。観光のような非日常気分を味わえました!

向井詩保さん（33歳・鳴門市出身）

徳島、香川、兵庫に6店舗を展開する、1967年創業の寝具専門店。今秋「ふとんのタカハシ」川内店にベーカリーを併設するというニュースが話題を呼んでいる。

これまでも、臨空本部前の海岸清掃やとくしまマラソンの給水ボランティア、児童福祉施設への寝具贈呈、「とくしま協働の森づくり事業」への参画など、積極的に社会貢献活動をおこなってきた同社。令和2年度より「とくしま農山漁村（ふるさと）応援し隊事業」の協働パートナーとしても活動する。社長の高橋武良さん（56歳・吉野川市出身）がふるさと団体の活動一覧を見て、馴染みあるイベントや祭りが多くあることに親しみを覚えたのが参加の決め手。「こうして地域で活動する機会を与えてもらえるのはありがたいこと。地域貢献に関心があっても、どうしたらいいのかわからない、という企業や団体も多いと思うんです。そのきっかけとしてぴったりの制度ですよね」。

ふるさと団体の応援はコロナ禍でしばらく止まっていたが、今年1月から本格的に再開。勝浦町の「ビッグひな祭り」に向けた、ひな人形の受け取りと仕分け作業のサポートを皮切りに、さまざまな活動に参加している。5月には、同じく協働パートナーの西精工株式会社とともに牟岐町出羽島へ。社内活動である社会奉仕委員会のメンバーを中心に有志5名が、海岸の清掃や段々畑の手入れ、植樹体験を行った。「豊かな自然に触れあえて、島のみなさんが温かく迎えてくださって…ボランティアのはずが、思いがけず観光に訪れたような非日常気分に。これまで知らなかった島のこともたくさん知れて、一緒に参加した社員たちも『行ってよかった』『また行きたい』と大満足のようでした」と向井さん。参加後、全社員に向けたチャットで、活動報告を出羽島の魅力と併せて発信。「私も行ってみたい」と関心を示す声も多く聞こえてきたという。

「当社が社会貢献活動をするのは、いつも支えてくださっている地域の皆様への恩返しの一つの形。生まれ育った徳島のためにできることでもあるので、これからも積極的に取り組みたいです」と向井さんは意気込む。次は、鳴門市で行われている伝統的なスサづくりの保全に携わりたいという。「ふるさと団体からの応援依頼の一覧を見ていると、楽しそうな活動がたくさんあるんです。自分が楽しみながら体験することで、〝私も参加してみよう!〟という前向きな気持ちが、社員たちにも徐々に広がればいいなと思います」。

高橋ふとん店の
ホームページはコチラから!

株式会社 松本コンサルタント

日和佐八幡神社の秋祭りに参加した松本コンサルタントの社員たち。初参加の人から参加経験のある人まで15名が参加した。

海へ飛び込むちょうさの様子。

これまで知らなかった徳島を再発見 社内コミュニケーションも活発になりました！

森口浩史さん（30歳・徳島市出身）　**松本憲資**さん（31歳・徳島市出身）

昭和46年の創業以来、地籍調査を中心に公共事業に携わりつづけてきた松本コンサルタント。現在では「空間情報コンサルタント」として、一般測量・調査、道路や橋梁の設計、GISデータ構築などを通して、四国を中心に全国各地のまちづくりをサポートする。

もともと、吉野川河川敷の美化活動を行う「アドプトプログラム」や本社周辺の国道を清掃する「ボランティア・サポート・プログラム」に取り組むなど、ボランティア活動や社会貢献活動がさかんな同社。「とくしま農山漁村(ふるさと)応援し隊事業」には「いつもお世話になっている自治体の皆さんに恩返しをしたい」と平成25年度から参加する。活動の中心となるのは、若手社員で構成される社内委員会「スマイル委員会」のメンバー。地元や配属支店が近い社員も参加するなど、輪は年々広がっている。

ふだんは徳島市の本社総務部で人事・労務管理、資産管理などを担う松本さんと森口さん。これまで、法市農村舞台（東みよし町）の設営や、高開の石積み（吉野川市美郷町）の景観保全活動に参加してきた。なかでも恒例となっているのが、毎年10月に行われる日和佐八幡神社（美波町）の秋祭り。今年、コロナ禍での一時休止を経て4年ぶりの参加が叶った。「久しぶりだったのに加えて、雨が降っていてけっこう大変でした。そんな中でも地元の方々の熱気やお祭りに対する熱意を感じられて、今年も貴重な体験をさせてもらいました」と松本さん。森口さんも「印象に残っているのは、やっぱりちょうさを担いで海に入ったところ。雨で波が高くて、いつにも増して迫力がありました」と振り返る。今回、松本コンサルタントからは15名が参加。今年初参加の社員も『次回も参加したい!』と前向きだった様子。ちょうさを担いで声を出し、地元の人と一体となる楽しさが伝わったようだ。

「ふるさと団体の応援は、協働パートナーの私たちにもいろんなプラスがある。とても感謝しています」と松本さん。「たとえばコミュニケーションの活性化。活動中はもちろん、移動の車内や活動後の食事など、社員同士が業務から離れた場所で、部署の垣根を越えた交流ができるいい機会になっています」。森口さんも頷きながら「いつもは徳島市内でオフィスワーク。活動を通して初めて美郷や日和佐を訪れて、これまで知らなかった地域の歴史や伝統文化に触れられたことで、徳島への愛着がより深まりました」と教えてくれた。

松本コンサルタントの
ホームページはコチラから!

株式会社 パソナ パソナ・徳島

行灯を設置するための支柱を立てる作業。10月14日のイベント当日は、辺り一帯が幻想的な明かりに包まれた。

休憩時間や行き帰りの道中でもコミュニケーションを深める。

地元の皆さんの「助かります」の言葉と温かいおもてなしがすごく嬉しいです!

（左から）支店長**有田智子**さん（広島県出身）　営業**井内理恵**さん（阿波市出身）

人材派遣や人材紹介、BPOサービス等を中心に、国内外で総合人材サービスを展開するパソナグループ。「社会の問題点を解決する」という企業理念のもと、福祉施設運営や地方創生事業にも取り組む。これまでペットボトルキャップの回収やフードバンクとくしまへの食料品提供、支店ビル前の清掃など、さまざまな社会貢献活動を行ってきたパソナ・徳島。令和2年度に協働パートナーとして「とくしま農山漁村（ふるさと）応援し隊事業」に参画してからは、地域とより密接に関わるようになった。はっさくの収穫作業（美馬市穴吹町）やゆずの収穫作業（吉野川市美郷）、相生晩茶摘み（那賀町牛輪）、きのこの植菌作業（三好市池田町）…と3年間で多くの活動を応援。県外の拠点から参加する社員もおり、有田さんも前任地の山口からはるばる訪れた経験の持ち主だ。「徳島への転勤が決まったときは嬉しかったですね。支店のメンバーとも活動で顔を合わせていたので、職場にも早く馴染めたように思います」。

今年10月には、坂本八幡神社（勝浦町坂本）の秋祭りに併せて開かれるイベント「さかもとあかりの里」の準備を応援。社員有志の4名が、会場となる坂本八幡神社の清掃や、行灯を設置する支柱立てに汗を流した。「地元の方が『助かります』と喜んでくださるのがすごく嬉しくて励みになる。お昼に手作りのカレーをふるまってくれたり、帰りにはミカンをおすそ分けしてくれたり、温かいおもてなしも最高でした」と有田さん。井内さんも「他の活動も含めると年に2、3回は通っている坂本地区。足を運ぶごとに顔なじみの方が増えて、毎回の交流が楽しいです」と笑顔を見せる。

活動の帰りにみんなで道の駅やカフェに立ち寄るのも楽しみの一つ。社内の親睦を深めるきっかけになっているという。「徳島は少人数の拠点だからこそチームワークが大切。活動を通して、支店と地域をもっと盛り上げていきたい」と意気込む有田さん。「派遣スタッフの皆さんにも参加してもらって、交流を深められたら」と構想を教えてくれた。

パソナ・徳島の
ホームページはコチラから!

西精工株式会社

100年企業として地元の力に活動の輪をもっと広げたい！

（左から）**大松藍**さん（22歳・徳島市出身）　**樫本拓哉**さん（41歳・阿波市出身）

吉野川市美郷でゆずの剪定と収穫をお手伝い。

「にほんの里100選」にも選ばれた高開の石積みの除草作業。

今年4月に創業100周年を迎えた西精工株式会社。自動車や家電、建設機械などのナットを中心としたファインパーツの製造・販売で、世界のものづくりを支える。

地元密着企業として「徳島をにぎやかに」という考えが根づく同社。各部署が自発的に、毎朝の会社周辺の清掃や、公園を整備するパークアドプト事業、近隣小学校の除草といった社会貢献活動に取り組む企業風土がある。「とくしま農山漁村（ふるさと）応援し隊事業」には平成26年度から参画。こうした活動のフィールドをさらに広げる契機となった。

社内での告知や参加者の取りまとめは、樫本さんが主任を務める生産技術係が担当。手を挙げた有志が、出羽島（牟岐町）の清掃や法市農村舞台（東みよし町）の設営、早成桐の植樹（美馬市）といった県内各地の活動に参加してきた。吉野川市美郷地区では、ゆずの収穫やホタルの保全などの作業を応援。高開の石積み周辺の除草作業に携わった樫本さんは「石積みを管理できる人が年々減っていると聞いて、『自分が力になれるなら頑張らないと』と身の引き締まる思いでした」と振り返る。「各地の名物も活動の楽しみの一つ。美郷では、活動後にいただいたお団子がすごく美味しかったです」。

応援し隊の活動は「徳島のいろんな地域を知れるいい機会」と口を揃える2人。入社5年目の大松さんは「徳島市内で暮らしているからこそ、自然や文化との距離が近い農山村漁村地域の方々から、学ぶことがたくさんあります」と話す。リピーターの割合が高い同社、課題は新たな参加者を増やすこと。大松さんは「若手社員をもっと巻き込んでいきたい。同世代を積極的に誘って、活動の楽しさを伝えたいです!」と頼もしい。

三好市池田町でキノコの植菌作業に取り組む大松さん。原木にドリルで穴を開け、ハンマーでしいたけの菌を打ちこむ。

西精工の
ホームページはコチラから!

学校法人 四国大学

相生晩茶摘みの応援では、地元の方々のレクチャーを受けながら「かきまぜ」など那賀町の郷土料理づくりを体験したことも。

2023年10月、海陽町の大里八幡神社秋祭りを応援。萩原教授もだんじりの曳き手として活躍した。

10年以上続くつながりと地域での学びの機会に感謝

（左から）経営情報学部**萩原八郎**教授　経営情報学研究科**李玲慧**さん（博士前期課程1年）

2025年に学園創立100周年の節目を迎える四国大学。「とくしま農山漁村（ふるさと）応援し隊事業」には、2010年度の制度発足当初から協働パートナーとして参画している。また、大学と地域社会の関係者が協力・協働して、地域の課題を解決するための知識や技術を身につけることを目指す「地域教育プログラム」を開設しており、学生が応援し隊の活動に参加して所定の条件を満たすと「地域貢献・ボランティア活動」として単位認定されるなど、積極的な参加を促す仕組みも整っている。

本年度は、有志学生が15件以上の活動を応援。7月には、那賀町牛輪での相生晩茶摘みを4年ぶりに応援した。午前中は、枝から茶葉を摘み取る作業に奮闘。作業後には、実際に晩茶を製造する作業場を訪れ、摘んだ茶葉が阿波晩茶になるまでの工程を見学した。「ふるさと団体の那賀川こまちさんは、いつも参加する学生の教育面にも気を配ったプログラムを考えてくださって、ありがたいですね」と萩原教授は話す。

経営情報学研究科（大学院）で学ぶ中国吉林省出身の李さんは、同じ留学生の友人とともにさまざまな活動に参加してきた。「特に興味があるのは、地域の食やお祭りに関する活動。日和佐八幡神社（美波町）や大里八幡神社の秋祭りでは、祭りが持つパワーを強く感じました」と振り返る。「大変な作業もあるけれど、地元の方々が優しく助けてくださるおかげでいつも楽しい。これからも活動を通して、徳島の各土地ならではの文化を学びたいです」。

来年度で制度参画から14年目。「同じ場所に通いつづけることで初めて気がつくこともある」と萩原教授。「たとえばある地域では、高齢化で行事の維持が年々難しくなっていた。だけど、数年経って気がつくと、なんだか活気があるんですよ。聞くと、地元の町役場の若手職員が、住民の代わりにリーダーシップをとっていた。応援し隊の中からもベテランが出てきて、初めて参加した人に指示を出していたり。改めて、制度に大きな可能性を感じた瞬間でしたね。人口減や過疎化が進んでいるからといって悲観的になりすぎなくていい、と実感できました」。

四国大学の
ホームページはコチラから!

応援を受けたい!
ふるさと団体▶▶▶▶▶

Q-1.どんな活動をするの?

大学、企業、NPO法人等と農山漁村集落の方との協働活動になります。例えば、棚田の保全活動、耕作放棄地の復元作業、農繁期の農作業の支援、棚田オーナー制度への参加、農山漁村観光ビジネスでの提携など。

Q-2.参加するメリットは?

【集落側のメリット】

人手不足の解消や地域資源の保全・有効活用など、都市部の方々との協働・交流による農村環境の保全や地域の活性化が期待されます。

Q-3.参加する集落の条件はあるの?

受け入れる側の集落は、協働活動の企画・実践・計画づくりを実施する意思のある農山漁村地域の住民で組織する団体やNPO法人、市町村等。

出羽島を考える会

段々畑にはるみの苗木を植樹。「木を植えるとその後が気になりますよね。ただ単に草刈りや清掃をするだけじゃなくて、こうして楽しみながら未来へつながる取り組みをプラスしています」。

海岸の漂着ごみを収集。

島の交流施設「波止の家」で活動の振り返り。

島への来訪は“希望”そのもの。お互いにとって実りのある滞在にしたい

原田友彦さん（46歳・埼玉県出身）

牟岐港から連絡船で15分、沖合にぽっかりと浮かぶ周囲約4kmの小さな島、出羽島。温暖な気候や紀州、室戸、四国山脈を望むパノラマ風景に包まれ、ゆるりと流れる時間に心休まる。また、漁業の隆盛とともに形成された伝統的な町並みは、平成29年に国の重要伝統的建造物群保存地区（重伝建）に選定されている。景観の保全や来訪者の受け入れといった選定後の変化に備え、島民と行政が一体となって立ち上げたのが「出羽島を考える会」だ。

重伝建選定から6年を迎えた現在、多いときは1000人を超えていた島の人口は100人を切り、人口減少と高齢化による担い手不足は年々深刻さを増している。「島外の人に応援してもらわないと」。様々な悩みを抱え、ふるさと団体として「とくしま農山漁村（ふるさと）応援し隊事業」に参加した。

昨年の6月から始まった協働活動は、今年の5月で3回目。協働パートナーである株式会社高橋ふとん店と西精工株式会社の計15名を、原田さんと牟岐町教育委員会の職員が3班に分かれて率いた。主な作業は、海岸や遊歩道の清掃と段々畑の整備。作業がひと段落したら、原田さんが取り組む「海に浮かぶ食べられる森プロジェクト」の一環として、段々畑への植樹体験を行った。最後は、伝統的な古民家を改修した交流施設「波止の家」で、島の女性部が手掛けたお弁当を食べながら活動の振り返り。参加者からは「やっと来られて嬉しかった」「今年で2回目。来年もまた来ます」などの言葉があったという。

「知ってくれる、来てくれることは、出羽島にとっての希望そのもの」と、噛みしめるように話す原田さん。「だからこそ協働パートナーさんには、応援してもらうばかりじゃなくて、こちらからもいろんな価値を提供したいんです」。たとえば、自然の中で過ごす心地のいい時間や、そこから学ぶ生活の知恵。島で得たものを、普段それぞれが暮らす地域にも広げてほしいと考えている。「協働活動を長く続けることで、お互いに違う視点からの意見や得意なことをシェアできるような、継続的な関係が築けるのがありがたい。そうすると、一緒に何か新しいものを生み出せる可能性が広がると思うんです。そして、島の持続はもとより、ステキな社会や豊かな地球を、いっしょに育てていけたらいいなと思っています」。

出羽島を考える会の
最新情報はコチラから!

日和佐ちょうさ保存会
（NPO法人 日和佐まちおこし隊）

秋祭り当日は日和佐ちょうさ保存会が参加者に赤いハッピを貸し出す。町外からの参加者が一目でわかり、地元参加者もサポートしやすい。

大きな掛け声とともにちょうさを持ち上げる。担ぎ手の熱気に圧倒される。

祭りを元気にできたら日常も活気づく 担ぎ手を募って続けていきたい

（左から）副会長**外礒千博**さん（48歳・美波町出身）　事務局**大城健志**さん（41歳・美波町出身）

毎年10月に行われる日和佐八幡神社の秋祭り。1年の豊漁豊作を祝って、「ちょうさ」と呼ばれる伝統の太鼓屋台が町内を練りまわる。この文化を次世代に守り継ごうと尽力するのが「日和佐ちょうさ保存会」。2010年の発足以来、フォトコンテストの開催やカレンダーの販売、子どもたちへの太鼓教室など、さまざまな活動に取り組んできた。

「とくしま農山漁村（ふるさと）応援し隊事業」には2012年から参加。地元高校の相次ぐ閉校や高齢化により、担ぎ手不足がいよいよ深刻化したことを受けての決断だった。「応援し隊事業を利用すると、企業と県を介して担ぎ手を募集できるので、お互いの安心感にも繋がると思います」と外礒さん。毎年、地元と町外からの参加者のそれぞれに心得をレクチャーし、事故やトラブルが起きないよう気を配る。

例年、協働パートナーと活動するのは秋祭り当日。重さ約1tのちょうさを50～60人で担いで、境内を練り歩いたのち大浜海岸へ（御浜出）。8地区の屋台が浜辺にずらりと出揃うと、ふたたび神社へと帰っていく（御入り）。なかには海へ飛び込む太鼓屋台もあり、大きな盛り上がりを見せる。4年ぶりの通常開催で「やっといつもの祭りが戻ってきた」と気合十分で迎えた今回。“赤ハッピ”と呼ばれる町外からの担ぎ手にも60人以上の参加があったという。

協働パートナーは「おってくれな祭りが成り立たない、ありがたい存在」と外礒さん。「以前は担ぎ手不足でちょうさが上がらなかった地区が、応援し隊の皆さんのおかげで、今では一番活気づいていますよ」と笑う。「なかには、毎年のように来てくれて、町の人と顔なじみになっている方もいる。特に松本コンサルタントの社員さんからは、地籍調査で日和佐を訪れたときに『あれ?秋祭りに来てくれていたよね』と再会することがあると聞いています」。

現在は年に1回、秋祭り当日だけの交流だが「たとえば道具の手入れや地区の忘新年会など、別の日にも一緒に活動できたら、さらに関係が深まって、祭りにもより親しみをもって参加してもらえるのかな」と構想する。「僕らにとっては日常があって祭りがあるので、ふだんのコミュニケーションがその2日間にギュッと凝縮される。本来なら町が元気だから祭りが活気づくんでしょうけど、町の人口がどんどん減っていくなかで、なんとか祭りを元気にできたら、日常も活気づくと思うんです。そのためにもやっぱり、町外から担ぎ手を受け入れながら続けていきたいですね」。

日和佐八幡神社の秋祭りについて
詳しくはコチラから!

ふれあいの里さかもと

10月14日に行われた「さかもとあかりの里」の様子。あいにくの天気ながら多くの来場者で賑わった。

坂本八幡神社の石段に行灯がならぶ。

協働パートナーの皆さんとともに高齢化が進む地域を未来に繋げたい

（左から）**秋山諒太**さん（34歳・神奈川県出身）　**新居正志**さん（63歳・勝浦町出身）

勝浦町坂本地区にある旧坂本小学校の校舎をリノベーションし、2002年に農村体験型宿泊施設として生まれ変わった「ふれあいの里さかもと」。宿泊をはじめ、地元の滋味を楽しめるランチや季節の体験メニュー、緑豊かなロケーションを活かしたイベントなど、さまざまな取り組みで地域に賑わいを生んでいる。

「とくしま農山漁村（ふるさと）応援し隊事業」には、制度が始まった当初からふるさと団体として参画。現在では、毎年2月から3月にかけて行われるひな祭りイベント「さかもとおひな巡り」の準備や、美しい村づくりのために取り組んでいるやすらぎの森やツツジ園の手入れなど、年間を通して7回ほど制度を活用し、協働パートナーの応援を受ける。「高齢化が進んで人手不足の地域なので、協働パートナーさんはなくてはならない存在。いつも頼りにしています」と新居さん。町内の他の団体にも制度を紹介し、ふるさと団体への登録を勧めているという。

10月には、坂本八幡神社の秋祭りに併せて行う行灯イベント「さかもとあかりの里」の準備を依頼。協働パートナーに、参道の石段の清掃や行灯を設置する支柱立ての作業を応援してもらった。「今年は例年以上に人手不足だったので本当に助かりました」と振り返るのは、今回から「さかもとあかりの里」実行委員長に就任した秋山さん。地元住民や町外の支援者に描いてもらった行灯の絵を「次回は協働パートナーの皆さんにも描いてもらいたいですね」と話す。

受け入れ時に心がけるのは「坂本を知ってもらうこと」。作業の合間で地域の魅力を伝えたり、地元の食事をふるまったり、おみやげに特産のミカンを渡したり。温かいおもてなしが協働パートナーたちを惹きつけ、活動のリピート参加に繋がっている。「世代交代が進む坂本地区。今の取り組みや地域そのものを未来に繋ぐために、協働パートナーの皆さんともより深い関係を築いていきたいです」と秋山さんは今後を見据える。

ふれあいの里さかもとの
ホームページはコチラから!

NPO法人 美郷宝さがし探検隊

「ホタル保全活動」の様子。車のライトを遮断する遮光ネット設置と、駐車場やほたる館周辺のゴミ収集を行った。

「ゆずの収穫作業」の様子。

ゆずの収穫作業は毎年大人気！四季折々の魅力を楽しんで

（中央）**武田彰仁**さん（73歳）

国の天然記念物に指定されているホタルや、特産品である梅、シバザクラが咲き誇る高開の石積み…豊かな自然と文化が息づく吉野川市美郷地区。こうした美郷の“宝”を次世代に守り伝えようと、平成10年に発足したのが「美郷宝さがし探検隊」だ。平成22年にNPO法人化し、翌年からは美郷ほたる館の指定管理者に。地域のイベント運営や観光ガイド、自然環境の保全活動などを行い、地域の活性化に寄与する。

他の中山間地域と同様、人口減少と少子高齢化に直面する美郷地区。25年前の同会発足時には現役世代だったメンバーも、今では70代、80代に差しかかり、担い手不足の悩みを抱える。「とくしま農山漁村（ふるさと）応援し隊事業」には、ふるさと団体として平成28年度に参画。現在は高開の石積みの除草やホタルの保全など、年3、4回のペースで応援を依頼する。「手伝ってもらえる人を募るにも、一人ひとり当たっていくのは手間がかかって大変。応援し隊の制度では、事務局の方が参加者の募集や調整をしてくれるので、すごく助かっています」。会のメンバーで、美郷ほたる館の館長を務める武田彰仁さんが感謝を口にする。多い年は50人以上が参加するという一番人気の活動が、毎年11月頃に行うゆずの収穫作業。後継者がおらず同会が管理を担うゆず畑を、協働パートナーとともに整備する。美郷ほたる館で注意点などを説明した後、畑でゆずの木の剪定と収穫を実施。和気あいあいとした雰囲気で作業を行いつつも、ゆずの木の鋭いトゲで参加者が怪我をしないよう気を配る。最後に、おみやげとして穫れたてのゆずをプレゼントするのが恒例だ。ゆずやゆずみそを使ったオリジナルレシピを添え、参加者たちに喜ばれている。

「地域の外から応援してもらえるのは本当にありがたい」と武田さん。ここ数年で急増したというシカの食害対策や、町内外から多くの人が訪れるホタルまつりや梅酒まつりといったイベントのサポートなどにも、応援し隊の力を借りたいと考えている。「四季折々の魅力があるのが美郷のいいところ。活動を通して、ぜひ季節ごとに足を運んで楽しんでほしいですね」。

美郷宝さがし探検隊の
取り組みはコチラから!

那賀川こまち

スギやヒノキの間伐作業。地元の林業従事者がサポートしながら、初心者の応援し隊メンバーものこぎりで木を切り倒す。

応援作業の前後に、那賀町伝統の郷土料理づくりを体験。

那賀町の伝統や文化を伝えて 地域や山を次世代に繋げたい

（左から）会長**橋本延子**さん（73歳・那賀町出身）　事務局**連記かよ子**さん（75歳・那賀町出身）

2003年に設立された、那賀町の林業研究グループ「那賀川こまち」。男性中心のイメージが強い林業への女性の参画や、健康的な山づくりと地域活性化を目指して活動中。現在は町内の女性3人が所属し、間伐や枝打ち、子どもを対象とした森林林業教室の開催や体験活動など、さまざまなことに取り組んでいる。

「とくしま農山漁村（ふるさと）応援し隊事業」のふるさと団体としても長年活動しており、定期的に応援を依頼しているのは、橋本さんが所有する山林での間伐作業だ。とはいえ、協働パートナーのほとんどが林業未経験者。当日は那賀川こまちのメンバーに加えて町内の林業従事者も駆けつけ、スギやヒノキをのこぎりで切る方法を指導する。また、「那賀町の文化に触れてほしい」という想いから、協働パートナーを受け入れる際には、作業とあわせて体験プログラムを提供する。なかでも参加者から好評だったのが、那賀町の郷土料理づくり体験。ゆず酢を使うちらし寿司「かきまぜ」をはじめ、大根のなますや山菜の天ぷら、こんにゃくやそばを手作りしたことも。「こうして地域の資源を活かしながら伝統や文化を伝えていくのが大切」と連記さん。活動時には、常にさまざまな形で学びを提供することを意識。昨年7月の相生晩茶摘みでは、協働パートナーを阿波晩茶の工場に案内し、製造工程の見学を行った。

「過疎化や少子高齢化が進む町をどうにかしたい。そのためには、町外の方に現場の課題をやさしく伝えていくのが私たちの役目だと思うんです」と橋本さん。「大事にしているのは、すぐに答えを伝えるのではなく、訪れた人自身に考えてもらうこと。たとえば間伐作業の時でも、整った場所や荒れた場所を実際に見てもらって、私たちが『どうなっていますか？』と問いかけるんです。そうすることで、保全についてより深く考えてもらえるはず」。健康的な山を守り伝えたい、という強い思いを胸に、これからも活動を続けていく。「一人でも多くの人に参加してもらい、地域を知ってもらうことが、未来に繋がると信じています」。

那賀川こまちの
取り組みはコチラから!

ふるさと団体&農山漁村協働パートナーの
参加者募集中!

協働パートナーに関するお問い合わせ

徳島県農林水産部　農山漁村振興課　振興・創生担当
〒770-8570 徳島県徳島市万代町1丁目1番地　TEL088-621-2486

ふるさと団体に関するお問い合わせ

管轄局	担当電話番号	管轄地区
東部農林水産局〈徳島〉 〒770-0855 徳島市新蔵町1丁目67 徳島合同庁舎	農村整備第一担当 088-626-8538 (088-626-8734)	鳴門市・勝浦町・上勝町 佐那河内村・神山町
東部農林水産局〈吉野川〉 〒779-3304 吉野川市川島町宮島736-1 吉野川合同庁舎	農村整備担当 0883-26-3782 (0883-26-3993)	吉野川市・阿波市
南部総合県民局〈阿南〉 〒774-0030 阿南市富岡町あ王谷46	農村整備第一担当 0884-24-4053 (0884-24-4306)	阿南市・那賀町
南部総合県民局〈美波〉 〒779-2305 海部郡美波町奥河内字弁才天17-1	農村保全担当 0884-74-7398 (0884-74-7378)	牟岐町・美波町・海陽町
西部総合県民局〈美馬〉 〒779-3602 美馬市脇町大字猪尻字建神社下南73	農村保全担当 0883-53-2281 (0883-53-2084)	美馬市・つるぎ町
西部総合県民局〈三好〉 〒778-0002 三好市池田町マチ2415	農村保全担当 0883-76-0662 (0883-76-0455)	三好市・東みよし町

徳島県農林水産部　農山漁村振興課
振興・創生担当
〒770-8570 徳島市万代町1丁目1番地
TEL:088-621-2486 FAX088-621-2859

本冊子はタウトクを再編集して制作しました